

「集団規範の継承メカニズム」

なぜ人は次世代にルールを引き継ごうとするのか？

2017 年 5 月 18 日(木) 開催

1. はじめに

「MOT 勉強会」2017 年度の 2 回目は、さる 5 月 18 日(木)、中央区京橋区民館 2 階の 3 号室にて開催された。

講師は、東京国際大学人間社会学部専任講師の尾関美喜先生。
講演案内には、

「集団の中には、明文化可能なものから暗黙裡の規範まで、多様な規範が存在しています。こうした規範が集団の中で維持継承されるメカニズムは、集団レベルでは解明されてきましたが、個人内の心理的過程から説明する研究はなされていません。

本発表では、集団規範が継承されるメカニズムについて、先行研究によって明らかにされてきた集団レベルの継承課程を紹介したうえで、私が現在行っている、個人の心的な機能に着目した研究について発表します」と書かれていた。

尾関先生は、2009 年に名古屋大学大学院教育科学発達科学専攻博士の後期課程を修了されて博士になられた。

専門領域は、社会心理学。研究テーマは集団、社会的アイデンティティ理論、防災意識など。

また、日本グループ・ダイナミクス学会理事を務めるなど幅広く活躍されている。

2. 講演概要

配布された資料は、46 ページのパワーポイントからなる冊子で、講演はレジメに沿ったスクリーン映像を元に進められた。

レジメの構成は、以下の通り。

1. 集団規範とは何か
2. 集団規範維持のメカニズム
3. 集団規範継承動機尺度の作成

「1」と「2」は先行研究によって明らかにされてきた集団レベルの継承過程の紹介。「3」が尾関先生自らが行った「個人内の心理的過程から説明する研究」の解説である。

2-1. 集団規範とは何か

ここでいう「集団」は、3人以上の人間からなる一定の目的をもった人間の集まりをさす。

「集団規範」は、「その集団における、一定の思考や行動などの基準、判断の枠組み」もしくは「その集団の中で暗黙裡に期待される行動や判断の基準」であり、集団の要件を満たすために必要な条件の一つである。

2-2. 集団規範維持のメカニズム

集団規範は、命令的規範と記述的規範に分類できるが、命令的規範は明文化されたルールで維持可能であり、記述的規範は「多くの人々が実際にその行動をとることで維持」される。

集団規範の維持方法としては、一般に以下の3つが挙げられる

- ・既存成員から新人への教育
- ・新人による受容
- ・他成員の観察と、行動の模倣

これら3つの集団規範維持方法は、「記述的規範」「集団社会化(発達)モデル」「正統的周辺参加理論」といった先行する既存の研究視点から説明できる。

しかし、これらの説明は、「集団レベルの現象としての説明」にとどまっており、「個人内の心理的過程から説明」にはなっていない。

2-3. 集団規範継承動機尺度の作成

ここからが尾関先生の研究内容である。

レジメの構成も「問題、目的、方法、結果、考察」という論文形式の流れになっており、2つの実験プロセスで構成されている。

(1) 集団規範継承動機尺度の作成

ここでの研究は、尾関先生の主テーマである「集団規範継承を個人のこころのはたらきから説明」を目的とするものである。

前例の無い研究のため、「動機」をキーワードにして、全く異なる分野の、「遺産を継承する動機」に関する研究成果に着眼し、そこから類推して集団規範継承動機の仮説をたてている。

即ち、「遺産を継承する動機」には、愛他動機、保存動機、交換動機、利己的動機があるが、その中で「愛他的動機と利己的動機」に着眼して、ここでの研究目的を「愛他的動機・利己的動機をもとに、集団規範継承動機尺度を作成する」とした。

調査方法は、部活動・サークルに属している大学生 161 名に対して質問紙調査を実施。

質問内容は、集団規範継承動機尺度(25 項目)、集団アイデンティティ尺度、革新志向性尺度、管理性尺度から構成され、分析に際しては、因子分析を用いた。

即ち、因子分析を用いて動機となる 4 因子を導き、三つの尺度と 4 因子(動機)との間の相関(基準連関性)を同じく因子分析を用いて解析している。

結果は、愛他的動機と利己的動機が、責任動機・継承義務動機・集団像保存同期・決定動機の 4 因子構造となった。

結果は、これら 4 因子構造に問題は無かったものの、動機となる 4 因子と、3 つの尺度との間の「基準連関妥当性」がいまひとつであったようだ。

具体的には、4 因子全てと相関の優位性が確認できたのは管理性尺度のみであり、他の個人特性にあたる概念である集団アイデンティティ尺度や革新志向性尺度との間の相関の優位性は部分的にとどまっていた。

因みに、4 つの動機の意味は、以下の通り。

- ① 責任動機: 次世代に対する配慮や責任、影響力に関する項目
- ② 継承義務動機: 上の世代から受け継がれてきたものを守って次世代に継承することが義務だから
- ③ 集団像保存動機: 集団の現在の姿を守るために集団規範を変えるべきでない
- ④ 決定動機: 自分の世代で集団のことを取り決めたいし、決める権利がある

(2) 集団規範継承動機と継承の関係

(1)の調査から、集団を構成するメンバーの個々人の特性や一存とは別の論理で集団規範の継承が行われている可能性が浮かび上がる。

「多次的無知」という考え方があるそうだ。それによれば、「集団成員の多くが、自分自身は集団規範を受け入れないにもかかわらず、他の成員のほとんどがその規範を受け入れていると信じている状況」を指すらしい。もしこのような考え方にもとづいて集団規範継承が行われているのであれば、(1)の調査における基準連関妥当性の「今ひとつな結果」も納得できそうだ。

次に行われた研究は、「集団規範継承動機は、実際に集団規範を『そのままにしたい』という意図を予測するのかを検討」することを目的とした調査である。

調査は2017年4月から部活動・サークルに所属している大学生に対して質問調査を実施したとのことで、この日の講演の二日前にようやくデータが出そろったそうで、報告書も書きあげている最中とのことであった。

現在進行中の調査ではあるが、ここまでに分かったことから結論すると、

集団規範継承動機と、実際に「どの程度そのまま引き継ぐか」は別と考えた方がよく、

- ・継承義務動機が有意傾向にあるものの、
- ・実際の継承は個人の一存が大きく影響することはそれほどない
- ・むしろ集団規範の継承は集団レベルの現象

ととらえた方が良いとのことであった。

(3) 総合考察

以上の調査結果に基づく個別の考察に加え、総合考察では、「もうひとつの可能性」として集団レベルの影響過程から分析を進めるという方法が提示されていた。

即ち、(大量の)集団を対象にデータを収集し、Multilevel-SEMによる分析を実施することで、集団レベルでの集団規範継承と集団規範継承動機との関連を検討することが可能になる。

「測定が難しく、結構きつい分析となるが、やってみる価値はある」と言葉を結んだ。

4. 所感

(1) 研究を前に進める迫力

まず際立ったのが、調査したアンケートの解析に因子分析など統計処理を駆使して、仮説の因果関係を明らかにしようとする姿勢である。

統計的分析では相関関係はともかく因果関係まで導くのは難しいと思うのだが、社会学の分析としては、アンケートからの統計的分析でしか表現できないため、その方法で突き詰めていくしかない。

であればこそとは思いますが、検証結果が想定と違った場合も、その結果を踏まえて新たな仮説設定と調査・実証を繰り返すために発生する多大の労を惜しまずにキチンと因果関係を詰めていく姿勢に敬服の念を覚えた。

調査方法も身近な学生を被験者にしたり、研究目的である仮説の検証にかなう質問項目の作成や直感的に答えやすい質問の仕方の工夫なども興味深かった。

また、「遺言の動機」の例のように、先例の無い研究テーマも全く異なる分野からレトリックを持ってくるなど、先生の研究を前にすすめる迫力に感銘した。

(2) チャルディーニ

尾関先生がお薦めの書籍「影響の正体」の著者。実験が面白いとのことで、社会心理学の調査研究をする上で参考になったそうだ。

著者はマーケティングでは「チャルディーニの法則」として知られているようだが、実験方法にフォーカスして書籍を読みたいと思った。

(3) 多元的無知

意味は先述の通りであるが、集団の中で自他の振る舞いを見ていると実に腑に落ちる考え方であると思った。

本研究でも、個人の動機から集団規範への影響を検証するはずであったのが、「継承は(おおむね)個人の一存では決まらない」という結論にいたったのも、意外なようでもあり、集団に対する世間一般的な感想に合致しているようにも思った。

多元的無知については、人間一般にそのような傾向があるからこそ、人間は他の動物と比してより高度で強固な社会やコミュニティを形成できるのであると思う。積極的に評価できる面である。

反面、いざ集団の改革を構成員が感じたとしても、改革そのものをはばむのが、人々の無責任な多元的無知であるとしたら、皮肉なことである。

(監修 加藤美治、執筆 石垣純)